

【活動レポート】7/27～8/8 「第3回 WBSC U-15 ベースボールワールドカップ 2016 in いわき」言語サポーター



この夏、福島県いわき市において、「第3回 WBSC U-15 ベースボールワールドカップ 2016 in いわき」が開催されました。本学からは、12名の学生が参加し、言語サポーターとして、リエゾン・アテンド業務に携わりました。

長く参加した学生で3週間近く、ほかの学生たちはほぼ2週間のボランティアとしての活動に参加し何を感じたのか、自分の成長について、活動レポートを書いてもらいましたので、紹介いたします(一部抜粋)。



(槍田ひかり 言語文化学部・チェコ語・4年)

私はこのボランティア活動を楽しむことができました。笑ったり、怒ったり、泣いたり、喜んだり、いろいろな感情がぎゅっとつまった日々で、「自分、生きてるな!」と強く感じました。これはこのうえない幸せなことだと思います。

今回、このようなボランティア活動に参加するのは初めてでしたが、相手に失礼のないように、邪魔にならないように、自分ができること、自分がどうやったら楽しく過ごせるか、を考えて行動するように心がけていました。その中で私が気づいたこと、それは、人と声を出して話をするのが、一番大事なことだという

ことです。ベンチから声を出して応援しているとき、監督同士の楽しい会話のお手伝いできたとき、日本の選手が外国の選手と楽しそうに交流しているとき、お互いの国の言葉であいさつをしているときなど、「言葉」が人々の表情をぱっと明るくしている場面にたくさん居合わせたことが、今回の活動を通して最も心に残っていることです。特に、アメリカチームの監督が最終日に、日本チームの選手に伝えたいことがあるから手伝ってほしい、とわざわざ私に声をかけてくださったときは、本当に嬉しかったです。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。この経験で得たこと、そして謙虚な心を忘れずに、これからも言語の勉強に励んでいきます。

(金春あさこ 言語文化学部・チェコ語・4年)

チェコチームに寄り添ったボランティアとして動いた中で気が付いたことは、通訳の仕事はただ機械的に言葉を翻訳するだけの仕事ではないということです。チェコ語から日本語よりも日本語からチェコ語の方が難しく、また最初のうちは日本語からチェコ語での伝達事項が多かったために「正確に伝えなければ」という気持ちが強すぎてとても神経質になっていました。また、日本の方は「通訳さん来て！」と呼んでは私の度量には構わず話したいことを一通り話してから「はい、訳して」と言われ、通訳というよりは自動翻訳機にでもなったような気持ちになることが多くありましたが、そういうものなの



だと思っていました。しかし、チームの方々との距離が近づいたときには違ったことを感じました。監督や団長はいつも「～って伝えたい(聞きたい)のだけど通訳お願いしてもいい？」と言ってくれ、話すときも短く区切ってくれることや難しい内容になると「もう一度説明しようか？」と言ってくれることもありました。通訳を終えると毎回「ありがとう」とお礼を言ってくれました。ただ話された内容を通訳するのではなく、一度会話を通して彼らの伝えたいことや聞きたいことを確認してから日本語で伝えるという形をとることが多く、コミュニケーションをとる手伝いをしているという実感が持てました。そのような状況にいと、不思議と通訳をするということへの無駄な緊張感が抜けたように感じました。通訳は機械ではなく人と人とのコミュニケーションを取りもつ役割であるということに気が付くことができました。もちろんどのような場で通訳をするかによって状況は異なりますが、それでも人と人との間に立つて行う通訳の仕事というのはその作業自体もコミュニケーションの一部であるのだと感じました。



(坂巻めぐみ 言語文化学部・スペイン語・4年)

7月27日から8月7日の12日間に渡って、第3回WBSC U-15が福島県いわき市で開催されました。私は今回、スポーツが好きで国際交流に興味があり、大学のゼミナールでコミュニティ通訳を学んでいるという理由から、この大会に学生言語ボランティアとして参加しました。

ボランティアの業務内容は海外チームを言語面で支援することで、いわき市職員の方と二人三脚でチームをアattendしました。私の担当は南米のスペイン語圏、ベネズエラチームでした。ホテルでの朝食から夕食までほぼ1日中チームと行動を共にし、事務連

絡から質問や確認など、日常で発生する日本人との会話全般をサポートしました。

大学でスペイン語を学び始めて4年目。多少なりとも役に立てるのはと申し込みましたが、活動を通して、改めて異言語間を仲介する難しさや「通訳ボランティア」の課題を痛感しました。まず、学習言語と日常の使用言語との違いです。実際の生きたスペイン語は、教科書や授業で習うような模範的で型どおり文とは大きく異なりました。さらに中南米の訛も加わって、知っているスペイン語とは全く別物のようでした。次に、互いの文化への相互理解です。チームをサポートする上で、言語だけでなく異文化への配慮も必要だと感じ

ました。日本とベネズエラ。常識や考え方の違いからどうしてもズレが生じ、納得を得るために根本からきちんと説明しなければならない場面もありました。最後に、「通訳ボランティア」に求められる知識範囲です。今回説明会では、あくまで言語面でのサポートがメインで、野球用語や専門知識は必要ない、地元のアテンドがいるから土地勘がなくても問題ない、とのことでした。とはいえ、知識不足が故に、会話内容をあまり理解できなかったり、情報を正確に伝達できなかったりと、自分に不甲斐無さを感じました。

全体を振り返ってみると、日本に居ながらまるで留学しているかのような2週間でした。大変なことや難しいことばかりで、何度も菌瘁い思いをしましたが、それ以上に多くの大切なことを学んだと思います。仕事への責任、周りへの信頼や協調性、そして何よりも国や言語を超えた人とのつながり、優しさを感じました。ベネズエラチームのメンバーは、私の拙いスペイン語でも辛抱強く一生懸命聞きとって、私が理解できるよう易しい言葉遣いや言い方を工夫して伝えてくれました。また、いわき市の人々や他の学生ボランティア、大会運営スタッフなど、関係者全員が大会成功のため一体となって協力し合う中で、思いやり精神や人の温かさを感じました。

ボランティアに参加して、大学の授業や教科書からは学べない、そして留学ともまた少し違う、とてもいい経験ができました。世界各国のチームが集結したこの大会を通して、異文化を肌で感じることができ、「日本の考え方」と自分の世界の狭さを感じました。「与える」ことよりも「学ぶ」ことの方が、間違いなく圧倒的に多いボランティア活動でした。今回の経験はこれから社会に出て活かせる、かけがえのない思い出と自信になりました。

(原崎絵美 言語文化学部・スペイン語・3年)

私はパナマのチーム付き通訳として2週間活動しました。業務内容は本当に多種多様でした。言語サポーターというよりはチーム全体のマネージャーのような立場になり日々のスケジュール管理や洗濯物の管理、外出時の鍵の回収や様々な場面での通訳の役割等たくさんのことを任せて頂きました。

私は対象言語がスペイン語でしたが、大学で学ぶスペインのスペイン語と彼らが話す中米のスペイン語のギャップが大きすぎて活動開始当初は本当に不安と悩みばかり抱えていました。言語サポーターとして来たのにスペイン語が聞き取れないという状態で2週間やっていけるのかという不安に打ちのめされそうだったことも事実です。しかし来たからにはやり遂げなくてはという思いのもと、1日1日少しずつ経験が増える毎に自分がいわきでの生活に慣れていったのが体感できました。他の方々も皆同じだと思いますが私もチームのメンバーに何度も救われ、元気をもらいました。私が早いスペイン語が聞き取れないとわかると何も言わなくてもゆっくり話してくれるようになったり、試合中でも私に話しかけて輪に入れてくれたり、素敵な贈り物も頂きました。いつも笑顔で私の名前を呼んで話しかけてくれたコーチ陣と選手たちには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。そんな彼らに囲まれて過ごすうちにいつの間にか当初抱えていた言語面での不安も消え、活動が半分を過ぎたころには終わりへのカウントダウンをするのが悲しくなっていました。

今回のこの活動ではたった2週間ではありましたが間違いなく自分のスペイン語スキルが上達したことを感じました。またそれだけでなく自分の精神面での成長を感じたり、大学では学ぶことのできないような責任感を持って働くことの大変さ、異文化を背景に持つ人々をつなげることの難しさなどこの活動ならではの学びも多々あり、本当に自分にとってかけがえのない思い出と学びができた2週間だったなと改めて感じます。大変な思いもたくさんし、悔しくて涙が出たこともありましたがチームのみんなやボランティアの仲間、いわき市の方々、デスクの方々など本当に多くの人に支えられて2週間密度の濃い時間を過ごすことができました。この機会を与えて下さった全ての方に感謝の気持ちでいっぱいです。



(野村果穂 言語文化学部・スペイン語・3年)

まず空港でのお迎えの際に初めていわき市の職員の方と対面して、コロンビアのチームにサポートとして同行するのは自分と職員



の方、2人だけだということを改めて実感しました。始まる前はスペイン語の通訳を専門とする方が1人くらいはいらっしゃるだろうと考えていましたが、実際行ってみると空港からいわきに到着するまでスペイン語を理解できるのは自分だけだと知り、一気に責任感が湧いてきました。コロンビアチームが到着すると、

さすが南米人、かなり自由でスペイン語以前にまとめることに苦労しました。

試合も重ねて、選手たちと時間を共にしていくうちに彼らも私に話しかけてくれるようになり、日々楽しく過ごすことが出来ました。いままです部活のマネージャーというのをやったことがなかったのでなんとも言えないのですが、後半はまるでコロンビアチームに昔から付いていたマネージャーのような気持ちでいました。初めは言葉の壁を乗り越えなくてはという思いで一杯でしたが、大会が終わる頃には通訳もちろん大事だが、それよりも彼らと良い思い出を作ろうという思いが強かったような気がします。

この大会を通して、自分のスペイン語力の無さに落ち込み、10月からのスペイン留学への意欲が高まったと同時にスペイン語を操れることでこんなにも人の役に立つことが出来るのだと改めて思い知り、スペイン語を使用する職への興味が大きくなりました。

また私がサポートしたコロンビアチームに付いてくださったいわき市の職員の方はとても頑張り屋で、親切で本当に良い方でした。当初は多少の英語しか分からなかったため、正直大丈夫かな？と心配する気持ちもあったのですが、野球経験者ということもあり、みるみるうちにチームのメンバーと仲良くなっていき、「たつや、たつや」と呼ばれるようになっていました。その光景を見て、もちろん言葉が通じることで便利な部分も大きいのですが、仲良くなるためには言葉というよりもその人の気持ちが最重要なのだなと思いました。彼は試合後など選手に積極的に「ナイスプレー」などと声をかけていて、その熱意が選手に伝わったのだらうと思いました。総じて、とても頼りになる方だったので、安心して仕事をすることが出来ました。

今回ボランティアに参加した最も大きな収穫は、年齢、性別、人種を超えた友人が多く出来たことでしょう。彼らと出会えたことで私の夏休みはとても有意義なものになったことは間違いありません。

(青木みのり 言語文化学部・ペルシア語・2年)

このボランティアは私に大きな影響を与えてくれました。まず私は「英語」という言語に関してボランティアを通じて深く考えることができました。私はNZ選手の通訳をさせていただきました。ボランティアをするまでは「英語は英語」、英語の国による訛りなどを気にしていませんでした。しかし正直、NZ英語、いわゆるkiwiEnglishは私には聞き取りづらく、相手も私の英語は聞き取りづかったようで、「こんなに私って英語話せなかったっけ」と少し悲しくなりました。大学生活の中



で英語で友達と話す機会がよくあり、その時はなんの支障もなく会話ができていたのでボランティアであまりにも英語でのコミュニケーションに支障を感じてしまい驚きました。考えてみれば、英語で話していた友達は、カナダ、アメリカ出身者または非英語母語話者(イタリア人など)でした。カナダやアメリカ英語、非英語話者の英語は聞き取れる。これだけで私は「自分は英語が話せる」と思い込んでました。NZの英語はよくわからないけどそれ以外の英語なら話せる。これは真に「英語が話せる」と言えるのか。私の英語力は本当にまだまだだと実感しました。NZを含めもう少し広い範囲で使える英語を身につけたいと強く思いました。(活動の最後には)英語での支障はすこし感じたものの、私なりに積極的に選手に話しかけ心の距離は縮まったと思っています。

約2週間のボランティアはいろいろあったせいなのか、とても長く感じられました。様々な人に会い、さまざまな事を学び、自分と向き合い、悩み考え、人として少し成長できました。こんなに「やってよかった」と思えるボランティアはありません。最高のボランティアでした。



(木村エミ 言語文化学部・インドネシア語・1年)

私はオーストラリア代表のチーム付き通訳としてこの大会に参加させて頂きました。業務内容は通訳兼野球部マネージャー兼みんなのお世話係という感じでした。このボランティア活動を通して自分は色々な面で成長できたと思います。

まずは語学面での成長です。英語圏に短期留学に行った方々と負けなくらい、私も実践的な英会話が身につきました。コーチ陣の大人会議に混ぜて頂いたり15歳以下の選手のみんなの若者の会話に入れてもらったりと、日本にいながらにして「生」の英語

を体感しました。電話に出るときも自然と“Hello?”と出てくる位英語に触れることが出来ました。また、通訳するなかで野球の専門用語などといった分からない単語も出て来たりしたのですが、その時は相手に伝わるように簡単な言葉で言い換えるようにしました。物事を自分の言葉で工夫し説明することで英語力が少し上がったのかなと思います。成長を感じると同時にもっともっとどうまくコミュニケーションが取れるようになりたい、英語の他に色々な言語を勉強してたくさんの人の架け橋になりたい、と強く思うようになりました。

次は臨機応変に対応する力が少しいたと思います。大会期間中では予定通りにいかないことがたくさんありました。私にとってたくさんの想定外なことが起こりました。が、このボランティア活動を通して、焦ったりしても何も起こらないから、前向きに考え全力で向き合ったほうが良いということを学びました。一緒に仕事をさせて頂いた大人の皆さんを見て、何かがあったときは焦ったりせず、冷静に考え行動しなきゃなのだと学びました。

私はこの通訳ボランティアでたくさんのことを学びました。国際大会だからこそ学んだことは、言葉もちろん大事だけど、一番は



「笑顔」だということです。スペイン後や中国語なんて“Hola”や「謝謝」しか喋れないけど、笑顔でいれば向こうも笑顔になってくれて、もうお友達になった気分になりました。また、言葉が分からなくても「この人と通じ合いたい」という気持ちを持つことが大事だと分かりました。ジェスチャーや相手に伝えたいことを文字で書いてもらってそれを辞書で調べるなど、そういうコミュニケーションを取ろうとする努力が必要だと思いました。最後に、「周りを見る」の大切さを学びました。選手の飲み物が足りなくなったら補充するというだけでなく、選手の皆さんが少し落ち込んでいたら何か言葉をかけたり、何か困ってそうな方がいたら手を貸したりするなど、周りを「感じ取れる」ことが他人の役に立つために一番大切なのかもと思いました。

この活動を紹介してくれた友達やチャンスを頂いた学校や一緒に仕事をさせて頂いた皆さんに感謝したいです。このボランティアに参加して心から本当に本当に良かったなと思います。

※写真のうさぎのぬいぐるみは、オーストラリアチームの試合をベンチで見続けた、チームマスコットだそうです(VOLAS注)。



(工藤清香 国際社会学部・インドネシア・1年)

今回の体験は、私の人生において、初めて“仕事をする”ということを感じた2週間になりました。仕事内容は、事前に伺っていた“言語サポーター”とはかなり違ったもので、より責任が伴うものであったと思います。朝食の時間、ケータリングの相談、ゲストハウス(ロッカールーム)への誘導、ランドリーの回収から監督・選手へのインタビューの通訳、試合中の飲料の補充まで、本当にたくさんのことをしました。日本語で表現すると、英語が話せる女子マネージャーのような立ち位置であったように感じます。一番チームに近いスタッフとして、また、優勝を狙いに来ている

アメリカチーム付きのリエゾンとして、WBSC本部、いわき市、ツアーデスク、チームの間の板挟みになることもありました。ツアーデスクの方からもお話は伺っていたのですが、やはりアメリカチームは他のチームとはまた違った、独特の雰囲気があったように感じます。特に試合前は、気を使いました。大会期間中も、他国に通訳としてついている皆さんと比べてチームに溶け込めていないように感じ、接し方に悩んだこともありました。それでも、あまり会話をする機会はなくとも、会うたび声をかけてくれる監督やコーチ陣、目が合ったり、名前を呼んで声をかけると笑いかけてくれる選手たちに支えられて、やり遂げることができました。序盤は特に団長の英語が聞き取れなくて、3回くらい聞き返したことも何度かありましたが、それでも嫌な顔せず伝えてくれました。選手へのインタビューの際には、私分からない野球用語などが出ると、周りの選手がみんな助けてくれました。チームの皆さんは、大したことでなくても、毎回必ず Thank you.と言ってきて、チームの行程をサポートするはずの私が逆に助けられていたように感じます。

球場では、通訳さん！と呼ばれては飛んでいき、球場側の要求をチームに伝えていました。試合中は、公用語が英語なこともあり、選手交代などの通訳は基本的にしませんでした。

初めころは、本当に“野球をしに来た”(当たり前ですが・・・)という印象が強かったアメリカチームですが、残り日数が少なくなるとつれチームの雰囲気も和んでくると、受け入れてもらっていたことを一気に感じました。最後の2日間はチームの皆から、ありがとう、ありがとう、最高だったと言って頂きました。決して最高の出来ではなかったですが、たとえうまくいかないことがあっても、懸命に伝えようと努力して、チームを第一に考えて諦めないでいれば、必ずその努力の過程を見てくれている人がいることを改めて実感できました。そして、何に対しても感謝の気持ちを持つこと。この2週間、初めは辛く感じて、自分の英語力に落胆することもありましたが、せっかく与えていただいた本当に貴重な機会を、ある意味で最大限利用しようと思うことで、今自分にできることをやろうと思えました。プロではなく学生なのだから、常に完璧にやろうとするのではなく、学ぼう、と気持ちを切り替えました。その点が自分の成長のように思い

ます。ある意味、私たちの役割が一番自由で一番板挟みで一番やりがいのあるものであったと思います。この機会を私たち学生に提供して下さったことに感謝します。今となって振り返ると、楽しいだけのことより、苦しんだことから学ぶものが多いように思います。更に今回は、苦しんだ先にこの大会に携われたことへの大きな喜びを感じられました。こうしてやり遂げられたのは関わって下さった全ての方のおかげだと思っています。

個人的にはこのようなアテンド活動はとてもやりがいがあり、言語という入り口を通して、様々なつながりを築くことができたと思います。業務内容はインターンをしているかのようでしたし、実際私は、(学生でありボランティアだとは伝えましたが、)チームの監督や団長からはインターンだと認識されていたようでした。その点、MLB や Los で働く人々とのコネクションができたことは今後の人生、働き方にも良い影響があると思っています。これからスポーツの国際大会のアテンドの募集がありましたら、積極的に挑戦したいと思っています。



(園部洋奈 国際社会学部・オセアニア・1年)

ホテルでは、JTBの方が一緒だったので、学生の私はアンパイアや役員の方がツアーデスクに来たら対応する、というスタンスで、毎日やる業務としてはランドリーの受付やお昼時にランチチケットを渡すことだった。仕事量は多くなかったが、要望に応じて喜んでもらえた時はとてもうれしかったし、毎日顔を合わせたので、ほぼ全員の方の顔と名前を覚えることもでき、仲良くなれたのでとてもよかった。決まった仕事あまりない分、自分で今何が必要なのか、考えることもできたのでとても良い機会だったと思う。また、JTBの方とデスクにいたので、興味があった旅行会社の仕事も少

しわかってよかった。

現地入りして数日経って平野球場の担当として呼んでいただいた。平では、初めて球場アナウンスをした。国際大会でアナウンスができるというのは貴重な経験だし、また、社会人のアナウンスの方にもいろいろなことを教えていただいて、勉強になることが多かった。その他、必要に応じて成田空港でのピックアップやグリーンスタジアムでのお手伝いをした。いろいろなお仕事に呼んでいただいて、様々なことを経験させていただいて、いわき市の方には本当に感謝してもしきれない。忙しい中でもいつも私たちのことを気にかけてくださり、笑顔で接して下さった。また、アンパイアをはじめ、多くの大会関係者も拙い英語でも一生懸命耳を傾けて下さったし、心暖かい対応には助けられた。感謝しかない。一方で、英語で言われたことをしっかり聞き取れなかったり、日本語を英語にうまく訳せなかったりと、歯がゆい思いをたくさんした。今回の活動を通して、英語学習へのモチベーションがよりいっそう上がった。次にこのような活動に参加した時にはもっと役に立てるように英語力を磨いていきたい。加えて、アンパイアの中には英語が話せない方もいた。彼らとは翻訳アプリを介して会話したり、言葉が伝わらなくても気持ちがあれば意思疎通はどうにかなるのだが、もし英語以外の言語も使えたら世界は広がるし、絶対便利だと思う。せっかく東京外国語大学という多言語教育の場に属しているので、今後は英語はもちろん、幅広く言語を学んでみようと思う。そしてともにボランティアとして活動した神田外語大、東京外大の学生の皆さんにはいつも励ましてもらい、いろいろなことを教えていただいた。すごく良い刺激だった。

最後に、総じて、とにかく楽しみながら活動できたのが良かった。いわきから帰りたくないほどだった。楽しみながらやるということは自分にとってプラスだし、周りにとっても良いことだと思った。笑顔で楽しんで活動するということが改めて大事だということを実感した12日間だった。

※右が園部さん。左と一緒に活動した神田外語大学の学生(VOLAS注)。

(西條佑紀子 言語文化学部・朝鮮語・1年)

コミュニケーションの補助に関しては痛感したことが2つあります。まず、自分の発話力のなさです。文法がよくないのか、発音がよくないのか一度で言いたいことを伝えきれないことが何度かありました。相手の言いたいことは聞き取って理解できるのですが、日本人の日本語をかみ砕いて英語にすることが難しかったです。そういうときは、日本人の方に何を言いたいのか詳しく聞いたり、単語を言い換えるなどして対応しました。ホテルに戻った後で神田外国語大学の先輩方に先輩ならどうやって英語にするか、ということ聞いてみたりもしました。先輩方は私の質問に答えるだけではなく、それに関連することも教えてくださって本当に



にいい勉強になりました。二つ目は、知識がないと英語にできないということです。記録委員長は大会のホームページ運営の責任者でもあったのでパソコンを使う機会が多かったので、Wi-Fiに関することやパソコンの調子に関する事で専門の方との間で通訳をすることがありました。もともとの語彙力が少なかったことに加えて、パソコンに詳しくなかったので表現が思いつかず苦戦しました。野球に関しては知識を持っていたので何とかできましたが、パソコンに関しては思わぬ伏兵とでも言いたくなるような感じでした。

2週間ほどでいろいろな経験をさせていただきましたが、どれも本当にいい経験でした。自分の英語力をよく見直せたこと、レベルの高い人たちの中で自分のモチベーションをあげられたこと、自分の中の知識を広げ、深められたこと、ほかにも挙げていけばきりがないほど多くのことを身につけられたと思います。よい友達にも出会えたり、尊敬でき目指せる先輩方にも出会えたり、ローカルスコアラの皆さんにもとてもよくしていただきました。パブロさんとは朝から夜までほとんど一緒にいて、スペインの方だったのでスペインについて話を聞いたり、WBSCのことにに関して教えてもらったりして、スペインに遊びに来たら家に泊めてあげるよ、なんて言ってもらえました。このボランティアに参加してよかったことは自分自身の一歩になったことだけでなく、よい出会いに巡り合えたことも大きかったと感じます。



(大木康平 言語文化学部・英語・1年)

自分の活動は技術委員長さんの通訳が主でしたが、技術委員の方々は、外国から来た方が多かったこともあって、皆さん英語でのコミュニケーションができていたため、ミーティングなどの集まりの際に通訳をすることはありませんでした。通訳の機会は各球場のスタッフさんとのやり取りやいわき市の職員の方々とのコミュニケーションのときだけだったのですが、言語サポーターとしての役割の機会があまりない分、外国の方々とコミュニケーションを多く取ることを心がけました。

自分が今回のボランティア活動を通して成長できたと感じる点は、以前よりも積極的になれたということです。英語で会話をすることはもともと好きだったのですが、外国の方に自分から話しかけることができずにいました。しかし今回は、技術委員の方々が野球関係者だったこともあり、自分から声をかけたり、会話に参加したりすることができました。残念ながら、通訳者としての成長はあまり感じることはできませんでしたが、語学を学ぶ上でコミュニケーションにおいて成長することができたのはとても大きいと思いました。今回のボランティア活動ではとても良い経験ができました。もしまたこのような機会があれば、今度は通訳者としても成長を感じられるよう努めたいです。

日時: 2016年10月07日